第４部 国民科国語と戦前・戦後の連続・非連続

第４部の目的

第４部は国民科国語と国民学校以前の教育からと、戦後の教育への連続・非連続について取り上げ、次の点を明らかにする。

１、生活主義教育と国民科国語の関係
　　－教育科学研究会が国民科国語に求めたもの－
２、合科教育思想と国民科国語の関係
　　－木下竹次の学習論の吸収－
３、大正自由教育から国民科国語へ連続されたもの
　　－明石女子師範学校附属小学校における及川平治の教育理念の継承－
４、国民科国語から戦後教育へ連続されたもの
　　－東京第三師範学校附属国民学校のカリキュラム改編－

児童中心の言語活動主義や音声言語重視、児童の発達段階を考慮した教材など、独自の国語教育観によって成り立った国民科国語は、戦前と戦後の教育と断絶していたのか、それとも連続していたのだろうか。

1941(昭和16)年4月1日の国民学校が開始された日を境に、現場の教師は教育内容や目標をすっかり変えることは難しい。教師は自らの経験の積み重ねと、新しい知識と視点を生かして、目の前の生徒の状況、教材の内容、時代背景や社会状況に照らして授業内容と方法を立案し、実行してきた。同じく、国語教育も前時代の反省から新しい展開をしてきたはずである。国民科国語の形成にはどのような教育遺産が連続されていたのだろうか。

そこで、国民科国語の実践が残されていることと、戦前や戦後に顕著な教育実践をしていることを条件に、次の教育運動および学校を研究対象とした。戦前の生活主義教育の代表であり、国民学校開始後も活動していた教育科学研究会。大正自由教育運動で合科教育として全国に名を知られていた木下竹次の奈良女子高等師範学校附属小学校。同じく大正自由教育運動で分団式教育の実践で有名であり、戦後もコア・カリキュラム実践で有名だった明石女子師範学校附属小学校。戦後は東京郊外の地域に即したコア・カリキュラム実践で知られていた東京第三師範学校附属国民学校。以上の代表的な教育運動と学校に共通することは、戦前・戦後に児童の言語活動を中心とした教育をしていた点である。

第１３章は昭和戦前期の生活主義教育と国民科国語との関係について明らかにする。生活主義教育者の多くは生活綴り方との関係で弾圧を受けて検挙され、教育活動を継続することができなかった(1)。その弾圧下でも活動していたのが、雑誌『教育』を運動拠点とした教育科学研究会（以下「教科研」）であった。教科研は理論中心の研究者と実践中心の教師・訓導によって、全国的に組織され、生活綴方教師が大量検挙された後も活動を継続し、戦後も続いている民間教育団体である。教科研は国民学校が開始する前の1940（昭和15）年4月に「国民学校案の国民科・国語の取り扱いについて」を文部省に具申

した。これまでその要望書と国民科国語との関係は明らかにされなかった。この要望が通っていれば、生活主義教育と国民科国語とが関係を持ち、生活主義教育は戦時下で途絶えたのではなく、国民科国語に組み込まれたことになる。そこで、生活主義教育と国民科国語との関係について、次の三点を調査する。

１．生活主義教育の言語活動意識

２．生活主義教育が国民科国語に求めた意見

３．生活主義教育による国民科国語の実践

１．については教科研の一人で国語教育について発言していた黒滝チカラ(2)を扱う。黒滝チカラは教科研のメンバーとして国民学校以前に生活主義の国語教育を提唱した人物である。

２．については教科研が文部省に提出した国民科国語への要望について調査し、それと実際の国民科国語の内容と照合する。

３．については教科研の一人で、神奈川県女子師範学校附属国民学校訓導の林進治の実践を扱う。

以上の調査から生活主義教育と国民科国語の関係について明らかにしていく。

第１４章は大正自由教育運動を推進した木下竹次(3)の合科学習が国民科国語にどのように連続していたかを調査する。合科学習は奈良女子高等師範附属小学校(以下、「奈良女子附属」)の主事（校長）である木下竹次が推進した、児童の活動を重視した低学年での教育方法である。奈良女子附属は公開研究会の他、日常でも授業参観を受け入れ、その人数は時には月に一万人を越えたという。それほど全国から注目され、各地の学校に奈良女子附属の実践を導入した形跡が見られるなど、全国の学校に影響を与えた教育である。奈良女子附属の合科教育は国民学校制度を審議する教育審議会でも取り上げられ、国民学校制度でも教科の統合、あるい低学年での綜合教授導入などの契機となった。その合科教育と国民科国語との関係はどのようなものであったか。前田賢次は奈良女子附属による合科学習の「内発的教育課程研究」を国民学校期では継承していないと指摘している(4)。児童を中心に考えたのではなく、国家主義の「皇国民錬成」のために上意下達で実施されたものであるから、外発的であると指摘するのである。しかし、研究の契機ではなく、カリキュラムの実態はどのような差があるのであり、木下竹次の合科学習と国民科国語の児童中心の言語活動主義とどのような点に連続があるのかを調査する。

第１５章は大正自由教育から国民科国語への関係として、兵庫県明石女子師範学校附属国民学校(以下「明石附属」)を取り上げ、教育理念の連続の有無を調査する。明石附属の主事（校長）であった及川平治(5)は児童の活動を中心とした分団式教育を実践した。分団式教育は教育方法の一つで、授業の展開の上で、児童の理解や学習速度が異なる場合は、別グループにして指導するものである。児童中心の学習を追究した結果、たどり着いた教育方法であり、奈良女子附属と並び、全国に名を知られていた。及川平治は1936(昭和11)年に明石附属を去るが、その後も明石附属は及川平治の教育理念を継承していった。明石附属は戦後に明石附小プランを発表し、コア・カリキュラム運動の中核となっていたので、コア・カリキュラム開始以前の関わりについて比較し、戦前－戦中－戦後という時代を経た国語教育の継承についても確認する。当時、師範学校附属は地域の学校へ国民学校の教育内容周知のために公開研究発表会を頻繁に行っていた。地域の学校に国民学校の授業のモデルを示す役割があった。明石附属には国民学校期の研究会の資料が多数現存している(6)。その研究発表会の要項と記録集に掲載されている

国民科国語の授業案と研究発表記録から、次の三点を調査する。

１．大正自由教育の批判と軍国主義教育への傾倒はどのような過程であったか。

２．及川平治の教育理念は国民科国語の授業に継承されていたか。

３．国民科国語と戦後の授業に連続はあるか。

１．については、及川平治の教育の展開を確認する。

２．については及川平治の教育理念が継承されているかを調査する。明石附属では及川平治の教育理念に従って独自なカリキュラムにより授業を展開していった。その独自な教育内容やカリキュラムが、軍国主義ではどのように継承されていったかを調査する。

３．については明石附属の国民科国語の授業記録と、戦後の授業記録から、ある訓導を選び、戦中と戦後の言及から、国民科国語のと戦後の関わりについて調査する。

第１６章は、国民科国語から戦後教育へ継承されたものを明らかにするため、東京第三師範附属国民学校（以下「第三師範附属」）のカリキュラム研究を調査する。第三師範附属は1944(昭和19)年より独自のカリキュラムである「農耕生産を中心として行学一体の教育」を実践した(7)。第三師範附属はなぜ戦時下の逼迫した時に、独自のカリキュラム改編を行ったのであろうか。そして国民科国語はどのように取り扱ったのか。これらの点について、第三師範附属がカリキュラム改編の記録をまとめた『国民学校 戦力教育』(8)（以下『戦力教育』）を扱い、カリキュラム改編の過程と、同校の戦後の資料から国民科国語との連続について調査する。